

同窓生シリーズ ③ 不登校児と百姓



第25回生 川又 直氏

昭和29年千葉県出身

昨年卒業以来二十二年ぶりに同期会が催され、在学時学校で会うより、雀荘やパチンコ店でよく出会った輩はすぐに固まりだした。やがて名刺交換。当時の落ちこぼれ連中も今では立派な社名と、肩書きが印刷されている名刺だ。某高校の体育科教諭もあの頃はお世辞にも真面目な生徒とはいえず、「学校の成績と出世は反比例するね。」との冗談。要は社会へ出てからが勝負ということか、どの顔も自信に満ちていた。

私は現在富山市の南、大沢野町の田圃の中に居

た期間、そのときの親の

不登校児といっても十人十色で閉じこもっていた。父は高校の数学教諭

で、さらに熱狂的東大ファンだった。家庭での親子の話は受験のことしか話題にならず、親子関係は最悪であった。学校も家庭もおもしろくない。近くに遊ぶところはあ

る。脇に逸れていく条件は整っていた。こんな毎日なので話し相手になっ

ていただいた先生も多かった。その中で「遊び人になるなら本当の遊び人になれ。ただ敵しいぞ。」

「お前のことを今はどうしようもないが、そのうちに気がつくからそれまでほっとけ」と楽観視している先生もいるぞ」という言葉が印象的だった。父からのアドバイスで唯一耳を傾けたものは「これからの時代はコンピュータにできない仕事を選べ。」だった。

卒業後は家を出て働いた。数職種を経験後静岡の牧場へ行った。そこに

某大英文科卒の先輩がいた。博識な彼の話はおもしろかったが、ちよつとしたジョークも間をおいてからでないと理解できなかった。仕事は牛の搾乳や糞処理等の肉体労働だが、何げなくのぞく教

養、人間としての深みを感じさせられた。大学へ行く目的はこれだとおも

い、五年遅れで入学した。卒業後、その牧場へ戻り、いわゆる不登校児と共同生活をはじめ、九年前に富山で独立した。

心の時代が叫ばれてきている。子孫に何を残すか、私は教育と環境だとおもう。この先安定した職業は少なくなる。百姓でさえ以前はお上のいう通り農産物を作っていたればそれでよかったが今は消費者や流通も考えねば作付けができない。大人社

会全体がストレスを溜めているようだ。その解消方法を知らない大人がけ

っこう多い。その反動が子どもたちを襲っているように見受けられる。

よく寮生を連れてメキシコ、N・Z、カンボジア等へ行く。外から日本をみないと、何が生活の上で大切な理解しづらい。様々な、体験をして視野を広げ、自分で判断していく。机の上の勉強は必要性を感じてからはじめても遅くはない。子どもたちの目先の現象にとらわれず十年先を見すえてのアドバイスが必要だと考える。担任だった故沢正雄先生に「ほつといてもやる子を大学へ入れるだけが教育じゃないよ。落ちこぼれた子をどうするかが本当の教育だよ。」と生前よく励まされた。

自由な校風新宿高校。そこで私は子どもたちとの接し方を教わった。今外は無農薬栽培のコシヒカリで一面緑色だ。

飲みながら「これからは百姓の時代よ」と自己啓発しながら寝てしまおうという生活だ。

不登校児といっても十人十色で閉じこもっていた。父は高校の数学教諭

で、さらに熱狂的東大ファンだった。家庭での親子の話は受験のことしか話題にならず、親子関係は最悪であった。学校も家庭もおもしろくない。近くに遊ぶところはあ

る。脇に逸れていく条件は整っていた。こんな毎日なので話し相手になっ

ていただいた先生も多かった。その中で「遊び人になるなら本当の遊び人になれ。ただ敵しいぞ。」

「お前のことを今はどうしようもないが、そのうちに気がつくからそれまでほっとけ」と楽観視している先生もいるぞ」という言葉が印象的だった。父からのアドバイスで唯一耳を傾けたものは「これからの時代はコンピュータにできない仕事を選べ。」だった。

私は現在富山市の南、大沢野町の田圃の中に居

た期間、そのときの親の

不登校児といっても十人十色で閉じこもっていた。父は高校の数学教諭

で、さらに熱狂的東大ファンだった。家庭での親子の話は受験のことしか話題にならず、親子関係は最悪であった。学校も家庭もおもしろくない。近くに遊ぶところはあ

る。脇に逸れていく条件は整っていた。こんな毎日なので話し相手になっ

ていただいた先生も多かった。その中で「遊び人になるなら本当の遊び人になれ。ただ敵しいぞ。」

「お前のことを今はどうしようもないが、そのうちに気がつくからそれまでほっとけ」と楽観視している先生もいるぞ」という言葉が印象的だった。父からのアドバイスで唯一耳を傾けたものは「これからの時代はコンピュータにできない仕事を選べ。」だった。

卒業後は家を出て働いた。数職種を経験後静岡の牧場へ行った。そこに